

# 『松浦宮物語』の「十四日の月」が象徴するもの

## —『浜松中納言物語』との比較から—

井 澤 夏 子

### はじめに

『松浦宮物語』における月表現は、五四例ある。その内、主人公と恋をする女君の登場に深く関係しているものは、三九例あり、大多数を占めている。ここから、本作品における「月」は、女性との恋の場面において必要不可欠な存在であったことが分かる。それはまた、作者である藤原定家にとって、月表現は物語作成における拘りの一つであったと言えるであろう。遠い唐国において、二人の貴く美しい女性との逢瀬を交わす夜に浮かぶ月は、まるで月だけが二人の逢瀬を知っているかのような雰囲気を出し出す効果を發揮している。

定家の本作品執筆における挑戦は、『源氏物語』の影響を受けた作品が多く作られ、「王朝世界」の象徴と云える『源氏物語』への憧れが溢れていた同時代に、「『源氏物語』の影響を極力排除しよう<sup>①</sup>」とした点であろう。それに加え恋の場面における月表現もまた、定家が、本作品を他の作品とは違う物語作品として位置付けるために、意識して使ったものと言えるであろう。

しかし、本作品における月表現だけを調査するだけでは、定家独自の月表現であるとは言えないだろう。神尾暢子氏は、八代集、後期物語の

月表現から、『松浦宮物語』の月表現の特徴を検討したが、「月と女性美表現との関係」に特定した調査であった<sup>②</sup>。本稿は、定家が『松浦宮物語』を執筆する上で模倣したと言われている作品の内、成立年が、近く『源氏物語』からの影響は大きいものも、完全にはその世界を模倣していない『浜松中納言物語』との比較から、恋の場面における月表現の特徴を考察していきたい。

### 二 月表現の比較

まずは、恋の場面における月表現を、①女性との逢瀬における情景描写中の月、②女性の美しさを表現している月、③眺める対象としての月と、それぞれ三つに分類したものを以下に記す。なお、引用本文、頁数は、『松浦宮物語』は新編日本古典文学全集、『浜松中納言物語』は古典文学大系に拠るものである。

① 女性との逢瀬における情景描写の中の月

【『松浦宮物語』…二十三例】

a 神奈備皇子…二例

木の間の月さし出でて（十八頁）

月明かき夜（二三三頁）

b 華陽公主：一〇例

月の明け行けば（四十一頁）

九月十三夜より五夜になん尽くすべき（四一頁）

秋の月の夜（四三頁）

八月九月の月のさかり（四三頁）

九月十三夜にもなりぬ（四三頁）

月もいりなむとするに（四四頁）

十月三日、月の入りなむとせん時（四七頁）

げに月の入るほどいたうも待たれず（四九頁）

月明かき夜（一三三頁）

泊瀬のや斎槻が下に照る月のひかりを袖に待ち受けて見る

（二三三頁）

c 母后：一一例

月はなやかにさし出でてをかしきほどに（七六頁）

十四日の月の、雲間を分けて澄み昇る空を（八三頁）

山の端出づる月の光（八五頁）

夕月夜のほどにまかり出づるも（九二頁）

人々も静まりぬるにや、月も入りにけり。（九三頁）

卯月の月のころ（一〇八頁）

さし昇るままにくまなき月（一一〇頁）

月も雲隠れぬ（一一〇頁）

いざよひの月の山の端出づるより（一二二頁）

月さし出でて（二二三頁）

月に催されては（一二九頁）

【『浜松中納言物語』：十六例】

d 唐后：二例

月隈なくさし（二七七頁）

月隈なく明き（二〇八頁）

e 五の君：一例

深き月の夜（二二三頁）

f 大武の女：五例

月いといみじう明き夜（二二七頁）

月いみじう（二三八頁）

月さし入り（二三八頁）

あか月かけて出づる月（二九二頁）

月のいとあかきに（二九三頁）

g 尼姫君：一例

有明の月（二五四頁）

h 吉野の姫君：五例

月いよくすみわたりて（三二三頁）

澄める月（三二四頁）

月のいと明うさし出でたる（三六〇頁）

明け方の月（三六二頁）

三月十六日の月（三七九頁）

②女性の美しさを表している月

【『松浦宮物語』…一一例】

i 華陽公主…三例

秋の月（四〇頁）

よしここに我が玉の緒は尽きななむ月のゆくへを離れざるべき

（四四頁）

おほぞらの月に（四五頁）

j 母后…八例

言ふかたなき月の影（八三頁）

見るごとに姨捨山の数添ひて知らぬさかひの月ぞかなしき（八四

頁）

かれは、ただ空行く月の心地して、（八八頁）

手に取ればあやなく影ぞまがひける天つ空なる月の桂に（一〇三

頁）

草の原影定まらぬ露の身を月の桂にいかまがへん（一〇四頁）

月の桂（一〇八頁）

行くかたも曇らぬ月の影なれど入る山までは尋ねても見よ

（一二六頁）

月の光に輝き合へる御顔のにはひ（一二七頁）

【『浜松中納言物語』…十例】

k 唐后…四例

なかばなる月（一六〇頁）

めでたき月かげ（一七八頁）

春の夜の月（一八五頁）

望月（一九四頁）

l 五の君…一例

月影（二一四頁）

m 大弐の女…三例

月影（二三八頁）

人の月影（二九五頁）

有明の月影（三九七頁）

n 吉野姫君…一例

隈なき月影（三六〇頁）

③物思いをしながら、眺める対象としての月

【『松浦宮物語』…六例】

o 華陽公主…二例

月の顔（四一頁）

暁近くに月の影（四五頁）

p 母后…一例

十四日の月（八三頁）

q 氏忠…三例

いどどありし月影（九二頁）【簫の女（母后）を想う】

月に向かひてのみぞ（九三頁）

いつとなく月こそものは悲しけれ春と秋とのあらぬ光に（九三頁）

【『浜松中納言物語』…八例

r 唐后…一例

月をつくづく（一七八頁）

s 五の君…一例

月をながむるほどなり（二二四頁）

t 中納言…六例

月をながめつつ（二二七頁）【五の君を想う】

六月の月（三〇七頁）【唐后を想う】

月いとあかう澄みわたりて、こよひは十五夜ぞかしな（三一九頁）

【唐后を想う】

三月十六日の月（三七九頁）【唐后を想う】

ありつる月影（三九九頁）【大貳の女を想う】

思ひづる人しもあらじ古郷に心をやりてすめる月かな（四〇二頁）

【吉野姫君を想う】

では、①から③それぞれの月表現の比較を行ってみたい。

①では、『浜松中納言物語』の月表現は、全体的に月の明るさ、光に  
抱り幻想的な世界観を構築させているように思われる。特徴として、ぼ  
んやりと照っているような月の光ではなく「月隈なくさし」（二〇八頁）、  
「月隈なく明き」（二〇八頁）「月さし入り」（二三八頁）「月のいと明う  
さし出でたる」（三六〇頁）に見えるような、闇夜を裂くような鋭い月  
の光を想像できる。これらは、『松浦宮物語』の「さし昇るままにくま  
なき月」（二一〇頁）や「月さし出でて」（二二二頁）といった月表現に、  
影響を及ぼしたと言ってよいだろう。しかし、『松浦宮物語』における  
月表現は、月の明るさが目を引く表現になつてはいない。むしろ、月は  
空にそっと浮かんでいるのだ。定家の月表現の特徴を、『花月百首』か  
ら指摘した加藤睦<sup>(3)</sup>氏は、月五十首の冒頭五首を挙げ、

月五十首の冒頭五首は、「秋はきぬ」と詠み出されている六五一番  
歌に端的に看取されるように、秋という季節の到来との関係のも  
とに詠出されている。ここでは、花五十首のように、桜という主  
題に作品世界の時空が埋め尽くされるような趣は見られず、秋と  
いう季節や他の景物、また詠者の心境が、月と調和をもつて組み  
立てられている。

と述べている。また、「よものそら」（六八八）、「峯のあらし」（六九四）  
を挙げた後、

月のみに焦点を当て広い空間に位置付けた歌も見出せるが、その歌

は少なく、月を秋という季節、秋の他の景物と調和させながら詠んだ歌の方が数多く詠まれている。

と述べている。月そのものではなく、あるものとの調和を図るための月として表現する精神は、『松浦宮物語』の月表現にも生きているであろう。

②では、月そのものや、月影に照らされた女性たちの美しい姿を描いており、両作品共に常套的な表現を使っていると言えるため、本稿では特に取り上げないことにする。

③では氏忠は、「いとどありし月影催さるる空の気色に、人は経立ち出でぬれど、ひとりながめ入りて」(九二頁)、「問はばや」の和歌を詠み、簫の女への想いを綴っている。その後、簫の女への恋心により心乱れる氏忠は、月を見てただ嘆き悲しみ、「いつとなく月こそものは悲しけれ春と秋とのあらぬ光に」(九三頁)と詠む。この「春と秋とのあらぬ光に」について、安道百合子氏は、

春の月、秋の月は、歌材としては憂いをさそう常套的なものかもしれない。しかし、ここに彼の物悲しさをさそう春の月、秋の月とは、二人の女性の面影を重ねたものと見ることができているのではない。月を見て、まずは梅里の女との月夜の逢瀬を想い浮べよう。春の月夜であった。さらに、華陽公主から琴の秘曲を学んだ秋の月夜を思い起こすだろう。

と述べている。春の月、秋の月が誰を指すかは、文中において、はっきりとは述べられていないものも、物語中における月表現に注意して読むと、自然と分かるような仕組みになっている。

『松浦宮物語』は満ち欠けする月により、月日の推移を表現しているだけではなく、氏忠と二人の唐国の女性との恋の行方を象徴しているだろう。華陽公主との逢瀬が顕著な例であり、「八月九月の月のころ」、「九月十三夜より五夜」と限定された期間の逢瀬であるため、前後の流れが読みとりやすく、「月」といった表記だけでもいつの夜の月であるかが分かるようになっていいる。

『松浦宮物語』における「月」の効果について、安道氏(注四)は、華陽公主、母后との逢瀬における月を調査しており、因縁に縛られる二人の女性が月光に照らされて登場する姿を「因縁に逆らわない姿」だと述べ、「物語は、天界の者を人間界に下ろすことで、予期せぬ恋愛をさせ、その恋を満ち欠けする月に象徴させて描いていくのではないか」と述べた。また、市東あや氏は、月が満ち欠けすることに拠り、月日の推移を示していることには特に注目していないが、華陽公主と「簫の女」としての母后との逢瀬は、それぞれ月夜であるのに、「月」を遮断した空間で交わすことを指摘しており、非常に興味深い。氏は二人との恋の「象徴」としての「月」に留まるのではなく、『松浦宮物語』で描かれる「月」は、主人公氏忠と女君たちの前世からの因縁と使命の象徴」であり、「氏忠と恋をすることのないよう戒める役割」を果たしていることを指摘し、氏忠とは前世の因縁はない神奈備の皇子の場合は、『松浦宮物語』本文中に登場する初めての「月」が神奈備の皇子との恋の場面であることから、華陽公主と母后との恋で「戒め」の月であることは、「意識せず『月』と共にあった神奈備の皇子との恋が功罪としてあったものと思われる。」と結んでいる。

どちらも、「月」から『松浦宮物語』を解釈する数少ない先行研究であり、両者の論に賛成である。しかし、『松浦宮物語』における月表現が、「満

ち欠けする月」として恋の場面において用いられていることについての指摘が、あまりされていないように思われる。私は、『松浦宮物語』における月は、「満ち欠けする」ことに重要な意味があると考ええる。そのためには、今まで比較対象としていた、『浜松中納言物語』では、「満ち欠けする」月は用いられているか、用いられていた場合、物語において、どのような効果を發揮しているのか調査を行ってみたい。

『浜松中納言物語』では、「有明の月」(二四五頁)、「あか月かけて出づる月」(二九一頁)、「明け方の月」(三六二頁)、「十五夜」(三一九頁)、「三月十六日の月」(三七九頁)、「春の夜の月」(一八五頁)、「望月」(一九四頁)、「六月の月」(三〇七頁)が挙げられるが、前後の流れを踏まえた上での表現とは言い難いため、『松浦宮物語』ほど、月の満ち欠けする要素に注目しているとは言い難い。

しかし、その内に類を見ない月表現がある。「三月十六日の月」である。中納言は、正月十余日の頃から、唐后の容態が悪いという夢をみるようになった。なぜこのような夢を見続けるのかと不思議に思っていると、

三月十六日の月、いみじうかすみおもしろきに、端近ふすだれまき上げて、みよしの、君とながめ出で給て、こよひのことぞかし、さ  
んいふの夢は思ひ出づるに、

「雲井の外の」

とのたまひし御けはい、今も聞くやうにおぼえて、

見し夢はあはれこよひの月のみぞそのおり知れるかやまな  
りける

うち泣き給て、添へ給へりし琴を掻きならしつ、ながむれば、更け  
行まゝに、浮雲やなびきかすみまされるに、常よりも心くだくるね

ざめは、空しき空に満ちる心ちして、月のかほつくぐとながむるに、空に聲のかぎりきこえて、

「かうやうくゑんの后、今ぞこの世の縁盡きて、天にむまれたまひぬる」ときこゆ。(三七九頁七行目、三八〇頁一行目)

傍線部のように、唐后の死が天から伝えられるのである。中西健治氏<sup>⑥</sup>は、「こよひのことぞかし、さんいふの夢は思ひ出づるに、」とあることから、中納言が唐で唐后と思われる女性と最初で最後の逢瀬であり、契を結んだ夜が、「三月十六日」であることを指摘している。作者が唐后との出会いと別れを「三月十六日」の定めていることは、何らかの意味がある。そして、「月」が夜空に浮かんでいたことに加え、この時の月が「十六夜の月」であることに最も注目せねばならないだろう。作者が、十六夜の月をその「形」に注目し、「これから満ちることなく、欠けていくしかない月」であると認識していたとすると、中納言と唐后との恋は、初めから終わりが見える恋であることを暗示していたのかもしれない。いつの月か、どのような形をしているか分かる月が、主人公と恋をした女性との恋の始まりと終わりの場面にでてくることは、作者が、その「月」に恋の行く末を象徴させているのではないか。そしてこれは、『松浦宮物語』にも通じる点である。しかし、定家がその効果を發揮させた月は、「十六日の月」ではなく「十四日の月」であった。この月は、一体どのような意味を持たされているのだろうか。

### 三 十四日の月

『松浦宮物語』で、「十四日の月」が出てくる場面は以下の三例である。



①八月十三日の月くまなく澄みのほりて、三十六宮まことに残るくまもなくおもしろきに、夜はことなる召しなくて参ることなし。

(中略) 明け行くほどに別れぬれば、すずろにもの悲しくて、帰る道すがら、ながめをのみぞする。(一一段)

暮れはてぬに急ぎ出でて、聞きしかたに尋ね行く。(中略) これも月の明け行けば、琴をおしやりて、帰らんとし給ふ時に、悲しきこととの似ず、おぼえぬ涙こぼれ落ちて、言ひ知らぬ心地するに、公主もいたう者をおぼし乱れたるさまにて月の顔をつくづくとながめたまへるかたはらめ、似るものなく見ゆ。(一二段)

②はかなく過ぎて、九月十三日夜にもなりぬ。(一三段)

御門、きのふより、悩ましくしたまひて召しなれば、暮れもはず、例のまどひ出でぬ。楼の気色、変はれることなし。残る手ども弾き尽くしたまひて、例の明け方になりぬ。月も入りなむとするに、「降り下りね」とのたまふ。(一四段)

③「さりや、その理りを知ればこそ、とむるしがらみもかひなけれ」とて、物をいとあはれとおぼして、十四日の月の、雲間を分けて澄み昇る空を、つくづくながめたまへる御かたはらめぞ、なほ似るものなくきよなる。(二七段)

①は、華陽公主との最初の逢瀬の場面である。これは、前段で氏忠が老翁にあった夜に「八月十三日の月くまなく澄みのほりて」いたので、「十四日の月」であることが分かる。②は、これもまた華陽公主との三回目の逢瀬だが、この日の内に秘曲伝授は全て終わっており、次回の逢瀬の約束を公主からしている。八月十四日夜の時点では、九月十五夜に秘曲伝授が終了する約束であったが、一日早まってしまっているのが分

かる。これは十四日の月が出ている夜に、約束が交わされることに定家の何らかの意図があるように思われる。十四日の月はまだ、欠けることなく、これから「満月」へと向かう月である。これは、二人の関係がまだ終わりではないことを静かに表現しているのではなからうか。

③は、氏忠の帰国を、頭では理解を示しているものも、心が追いつかず悲しそうに月を見つめる母后の横顔、母后の御衣の芳香の香りに魅せられた氏忠が、月を中心に描かれている場面である。この「月」が、「十四日の月」であることは、定家の特別な思い入れがあったに違いない。前述したが、これから満月へと向かう、欠けることのない「十四日の月」に、次第に母后への思いを募らせていく氏忠の恋の目覚めを物語っているように思われる。

また、次の段で氏忠が逢瀬を果たす女性が、母后の仮の姿、「簾の女」であることも深く関わっているのではなからうか。この「十四日の月」以降、「簾の女」との恋が始まる。この時も、月が夜空に浮かんでいるのだが、華陽公主との逢瀬の場面とは違い、ただ漠然と季節が春であることは想像できるが、何月であるかは明示されていない。「の女」と初めて逢瀬を交わす場面では、

夕べの空にながめわびて、なにとなくあくがれ出でぬ。いたく高きにあらぬ山がかるる里の梅のほひ、外よりもをかしきあたりを分け入れば、松風はるかに聞こえて、山の端出づる月の光、暮れはつるまに、浮き雲残らず空晴れて、さえゆく夜のさまに、物のあはれまさりて、(二八段)

から分かるように、月に加え、梅の香りが加わり、池田利夫氏が指摘し

ているように、「遊仙的雰囲気を漂わせる効果を發揮している」。「簫の女」との逢瀬の場面では、必ず梅の香りがしているのだ。しかし、氏忠が三六段にて、「簫の女」が現れた夜、女に見慣れたのか、母后に似ていることに気づく。「月の桂」を母后に喩え、「手に取ればあやなく影ぞまがひける天つく空なる月の桂」と「簫の女」に送る。その夜から、母后と「簫の女」の関連性に思い悩み、涙まで流す氏忠が三七段で描かれる。その直後の段である、三八段に「卯月の月のころ」と日にちが特定された満月が登場する。それから、四〇段の「簫の女」との最後の逢瀬には、「いざよひの月」が描かれている。欠けることのない「十四日の月」から恋が始まり、欠けていく「いざよひの月」で簫の女、母后との恋が幕を閉じているのだ。この流れは、非常に意図的であり、『松浦宮物語』における月表現は、非常に巧妙な技を使って表現されていることが分かる。

#### 四 おわりに

以上、『浜松中納言物語』との月表現の比較から、『松浦宮物語』の「十四日の月」の特徴を述べた。定家が、氏忠の唐国の女性との恋を「十四日の月」を使って、意図して象徴させた表現であると言ってよいだろう。また、定家の「十四日の月」への特別な思い入れは、『明月記』からも窺うことができる。池田利夫氏は

現に、定家十九歳の治承四年二月の明月記には、

十四日、天晴、明月無片雲、庭梅盛開、芬芳四散、家中無人  
一身徘徊、夜深帰寝所、橙髻髷、猶無付寝之心、更出南芳方  
見梅花之間

とあり、月光に映じ出された庭の梅に感動した定家が、寝つくに寝付かれぬ思いで、ひとり徘徊している様子が窺われる。

と述べている。「十四日の月」と「梅」が共に記されている点に『松浦宮物語』との関連性が窺われるが、ここから、「十四日の月」は、定家がただ、他に類のない表現をしようと試みた月表現ではなく、自分の実体験を基に用いたと考えることも可能であるだろう。

斉藤国治氏は、天文資料としての『明月記』読みをしているが、定家が「月」を好んでいたことは『明月記』の月の叙景描写が多いことから想像できることを指摘している。斉藤氏は、『明月記』における「月」の叙述の数量を調査しており、「定家の若壮年の頃と晩年の頃に月の叙景が多」いことを述べているが、これもまた『松浦宮物語』において、「月」が多分に登場している理由が裏付けされると考えることも可能である。また、斉藤氏は、一か月ごとの年月日を明記した月の叙述の頻度を調査しているが、「十四日の月」は、「十五夜」、「十六夜」、「十三夜」に続いて、四番目に多い。ここから、定家が月を好む理由の一つとして、和歌や物語の逢瀬の場面に浮かぶ情景描写の一つとしての「月」の美しさに惹かれただけではなく、実際に観察することで分かる「満ち欠ける」月の面白さや美しさに惹かれていたのかもしれない。少なくとも、定家は、毎晩、空を見上げ、月を観察していたことがよく分かる。だから、『浜松中納言物語』のように、「月の光」に注目するのではなく、「月」そのものの形に注目した表現方法となっているのだろう。そして、定家が実際に月を観察していたことにより、『松浦宮物語』に浮かぶ月は、読者に視覚的に訴えてくるものになっているのであろう。物語中に浮かぶ「月」は、氏忠の恋の行方を象徴してはいるものも、夜空に浮かぶ自



然物の一つとしての「月」という形を崩していなく、夜空にそつと浮かぶ「月」をうまく表現できたのは、偏に定家の日頃の月への関心があつたからこそであらう。

『明月記』から分かるように、定家にとって月を見ることは、現代の天体観察のような一面も持ち合わせていたのだから。観察対象としての「月」を、和歌の家の子、定家は、和歌においてどのように用いたのか。定家の月表現の特徴を見出すためには、物語に留まらず、定家の和歌から見出すことも必須であらう。樋口芳麻呂氏は、新編日本古典文学全集『松浦宮物語』の解説にて『花月百首』の「月清みねられぬ夜しももろこしの雲の夢まで見る心ちする（月五十首・六九五）は、『松浦宮物語』の朝雲的（注九）な恋を思わせる歌」であり、「さらしなは昔の月の光かはただ秋風ぞをばすての山（月五十首・六七八）」も、『松浦宮物語』の「見ることに嫉捨山の数添ひて知らぬさかひの月ぞかなしき（八四頁）」を想起させる和歌であると注目している。それに加え、『松浦宮物語』の成立年を建久元年と定める所以の一つにもなっていることから、『花月百首』の月五十首は、当時の定家の月表現の好みを知る上で重要な資料となるだろう。

今後の課題としては、『明月記』や『花月百首』を中心に、定家の和歌や歌論書、著作物から窺える月表現にも視野を広げ、定家が好み、目指した月表現とはどのような特徴をもっていたのか調査を行っていきたい。

#### 注

- （１）『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー 二〇一四）

（２）「松浦宮の唐土女性―月光と女性美―」（大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座『学大国文』第四五号 二〇〇二）

（３）加藤陸「藤原定家『花月百首』覚書」（立教大学日本文学会『立教大学日本文学』一一一―二〇一四 一）

（４）安道百合子「『松浦宮物語』の『つきのころ』―弁少将の恋と春の月・秋の月―」（広島平安文学研究会『古代中世国文学』七号 一九九五 八）

（５）市東あや氏は、「松浦宮物語」の女君―「月」を中心として―（『東洋大学大学院紀要』五〇号 二〇一四 三）

（６）中西健治『浜松中納言物語全注釈 上巻 下巻』（和泉書院二〇〇五）

（７）池田利夫「見ぬ唐土の夢―『松浦宮物語』を中心に―」（学灯社『国文学 解釈と教材の研究』二六巻 一九八一 一二）

（８）齊藤国治『定家『明月記』の天文記録―古天文学による解釈』（慶友社 一九九九）

（９）樋口芳麻呂氏は、新編日本古典文学全集の解説にて、「花か花に非ず」の白居易の詩には、「朝雲に似て、覓むる処無し」とあるが、「朝雲」は、『文選』卷十の宋玉の「高唐の賦竝に序」に、「王因つて幸ず。去る時は辞して曰く、妾は巫山の陽、高丘の岨に在り。旦には朝雲になり、暮には行雨となり、朝朝暮暮、陽台の下にありと、旦朝に之を視れば言の如し。故に為に廟を立て、号して朝雲といふ」とある、巫山の神女の化したものである。

と説明している。「花非花」は『松浦宮物語』の偽跋の末尾に書かれており、注でも指摘しているように「物語の構成に大きな影響をもつ」。これもまた、前世の因縁を持った唐土の女性との、叶わぬ儂い恋を表しているのだろう。

#### 参考文献一覧

- 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー 二〇一四）

- 加藤陸 「藤原定家『花月百首』覚書」(立教大学日本文学会『立教大学日本文学』  
一一一号 二〇一四 一)
- 市東あや氏は、『松浦宮物語』の女君―「月」を中心として―(『東洋大学  
大学院紀要』五〇号 二〇一四 三)
- 中西健治 『浜松中納言物語全注釈 上巻 下巻』(和泉書院 二〇〇五)
- 「松浦宮の唐土女性―月光と女性美―」(大阪教育大学国語教育講座・  
日本アジア言語文化講座『学大国文』第四五号 二〇〇二)
- 樋口芳麻呂 久保木哲夫『松浦宮物語 無名草子』(『新日本古典文学全集』  
小学館 一九九九)
- 久保田孝夫 関根賢司 吉海直人『松浦宮物語』(翰林書房 一九九六)
- 安藤百合子 「『松浦宮物語』の『つきのころ』―弁少将の恋と春の月・秋の月―」  
(広島平安文学研究会『古代中世国文学』七号 一九九五 八)
- 池田利夫 『浜松中納言物語総索引 第三版』(武蔵野書院 一九八九)
- 池田利夫 「見ぬ唐土の夢―『松浦宮物語』を中心に―」(『国文学 解釈と教  
材の研究』二六巻 一九八一 一二)
- 遠藤嘉基 松尾聡 『篁・平中・浜松中納言物語』(『古典文学大系七七』岩波  
書店 一九六四)